



上：和歌山城天守閣(北から)
下：西之丸庭園から御橋廊下を望む
右：和歌山城跡(三の丸)出土織部筒向付
左：和歌山城跡(三の丸)出土黒軸鳥形香合

和歌山城は天正13年（1585）、紀州を平定した羽柴（豊臣）秀吉が異母弟の秀長に岡山を中心とした築城を命じたことから始まります。翌年からは秀長の城代として桑山重晴が築城を続けますが、慶長5年（1600）には、関ヶ原合戦で東軍に属し、軍功を挙げた浅野幸長が城主となります。幸長は城だけでなく、城下町を整備するなど、現在の和歌山城と城下町の原形を築いたと言われていますが、元和5年（1619）に安芸（現在の広島県）に転封となり、新しい城主として徳川家康の十男である頼宣が入府します。頼宣は、和歌山城を天守閣・本丸を中心として周辺に二の丸・三の丸・砂の丸・西の丸・南の丸を配置した御三家にふさわしい城に大改築しました。以後、江戸時代を通じて和歌山城は紀州徳川家の居城であり続けました。

現在の和歌山城は本丸・二の丸の中核部分を囲む内堀までの範囲が昭和6年に国史跡に指定されており、三の丸や昭和になり埋め立てられた外堀（西汐入川・広瀬川）までの範囲については、「和歌山城跡」として周知の埋蔵文化財包蔵地とされています。

和歌山城とその周辺には、重要文化財を含めた数多くの文化財があります。このイベントでは、発掘調査された和歌山城内の御橋廊下や二の丸のほか、江戸時代には武家屋敷地が広がっていた三の丸、和歌山城築城の際に使用されたとされる石切り場と和歌山城内に残された石垣、紀州徳川家ゆかりの刺田比古神社を訪ねます。マップを手に和歌山城とその周辺の文化財を巡り、歴史を再発見しましょう。

和歌山城周辺の文化財地図

種別	番号	主な埋蔵文化財包蔵地及び指定文化財の名称
遺跡	1	和歌山城跡
	2	鷺ノ森遺跡
	3	鷺ノ森窯跡
	4	本願寺跡
	5	山吹丁遺跡
	6	友田町遺跡
	7	吉田窯跡
	8	岡の里古墳
指定文化財	9	史跡 和歌山城
	10	名勝 和歌山城西之丸庭園（紅葉溪庭園）
	11	天然記念物 一の橋の樟樹（県指定）
	12	史跡 加納諸平墓（県指定）
	13	史跡 岡山の時鐘堂（県指定）
	14	天然記念物 岡山の根上り松群（県指定）
	15	旧大村家住宅長屋門（県指定）

旧大村家住宅長屋門（和歌山県指定文化財）

現存する数少ない江戸時代の建築物で、もとは紀州藩士大村弥兵衛屋敷の長屋門として東坂ノ上丁に建築されました（後に磯山町、次いで現在地に移築）。長屋門とは、門と長屋の機能を併せ持つ建物で、内部は門番や家臣が居住する形となり、武家や庄屋などの上級農家の表門に見られます。

長屋門を建てた大村家は、今川義元の旧臣で徳川家康に仕えた後に、頼宣に付けられた由緒ある上級藩士の家系で、長屋門の門構えもそれを示すように重厚な外観です。壁は瓦を並べて貼り、その継ぎ目に漆喰を盛り付けるように塗って作られる海鼠壁で



長屋門全景

化粧されており、耐火性に優れる一方、手間にかかる工法であることから、大村家の財力の象徴と言えます。また、入母屋造りの屋根は本瓦葺きで、軒丸瓦には大村家の家紋である桔梗紋があしらわれています。

和歌山城岡口門（国指定重要文化財）

岡口門は、浅野氏が紀州藩主であったときには大手門（城の正門）でしたが、徳川氏が和歌山城主となって以降、元和7年（1621）の改修で大手門の位置が変わり、搦手門となりました。現在の建物はその際に建立されたものと考えられます。櫓門の形式で、門を入ると石垣に囲まれた武者溜があり、土堀には外敵を銃や弓で攻撃するための狭間があつて、城の防御を担ったと考えられます。

岡口門は空襲でも焼けずに残った江戸時代の数少ない建造物で、北側に40m続く土堀とともに昭和32年に国の重要文化財に指定されました。



岡口門全景

刺田比古神社・岡の里古墳

「延喜式」式内社、通称「岡の宮」と呼ばれています。祭神は大神佐比古命・道臣命です。もともと産土神として地域の崇敬を受ける神社でしたが、秀吉による和歌山城築城の際、城鎮護の神とされ、現在の場所に移し、社殿が修復されました。それは浅野幸長が新たに城主となった後も変わらなかったと伝えられています。

紀州徳川家との関係も深く、頼宣が社殿を修築して領地を寄進したほか、徳川吉宗誕生の際は当社の宮司が拾い親（当時、親の厄年に生まれた子どもは一度捨て子にすれば丈夫に育つと考えられていた）となり、その後吉宗が紀州藩主、更に將軍職に就いたことから、開運出世の神として崇敬されています。



刺田比古神社

また、境内には「岡の里古墳」が所在しており、昭和9年に発掘調査が行われています。当時の調査記録では出土した人骨や土器について記載があり、神社周辺には岡の里古墳以外にも未発見の古墳群が存在している可能性があります。しかし、現在は埋没した状況となっており、詳しいことは不明のままです。

近年の資料研究では、親の厄年に誕生したのは早逝した吉宗の次兄である次郎吉であり、その際の出来事が吉宗のものと同視されたとの説も示されています。

和歌山城及び周辺の年表

西 暦	和 暦	主な出来事
1563	永禄 6 年	鷺森に浄土真宗道場が移転
1585	天正 13 年	羽柴秀吉が紀州を平定する 和歌山城を築城し、和歌山は羽柴秀長（大和郡山）の所領となる（現 岡公園周辺から緑色片岩が切り出され石垣の石材として利用される）
1586	天正 14 年	桑山重晴が城代となる
1600	慶長 5 年	浅野幸長が紀州藩主（37万石余）となる 天守閣、城下町の整備に努め、内町、寺町、真田堀などを整備
1619	元和 5 年	家康の十男徳川頼宣が紀州藩主（55万5千石）となる
1621	元和 7 年	頼宣が幕府より銀2000貫を賜り、和歌山城を拡張（西の丸・二の丸ほか）
1684	貞享 元年	徳川吉宗誕生（刺田比古神社宮司が仮親となる）
1712	正徳 2 年	岡山に時鐘堂を建設し、時の鐘をつき始める
1839	天保 10 年	『紀伊統風土記』192巻が完成
江戸時代末頃		大村弥兵衛屋敷の長屋門が東坂ノ上丁に建築される
1869	明治 2 年	版籍奉還が行われる
1870	明治 3 年	廃藩置県の詔が出され、藩を廃止し、和歌山県となる
1889	明治 22 年	市町村制の実施に伴い、和歌山市となる。
1931	昭和 6 年	和歌山城が文部省から史蹟に指定される
1945	昭和 20 年	7月9日、和歌山大空襲により和歌山城天守閣、刺田比古神社が焼失
1957	昭和 32 年	岡口門が国の重要文化財に指定される
1985	昭和 60 年	西之丸庭園が国の名勝に指定される

歩いて知るきのくに歴史探訪 ～和歌山城とその周辺の文化財を巡る～ 古絵図で歩く和歌山城周辺の文化財マップ

令和元(2019)年10月26日発行

発行：公益財団法人和歌山県文化財センター（〒640-8301 和歌山市岩橋1263番地の1）

この見学会は令和元年度国宝重要文化財等保存・活用事業費（和歌山県内地域の特徴ある埋蔵文化財活用事業）の補助を受けて実施しています。

和歌山城跡(三の丸)

和歌山城跡(三の丸)は和歌山城の北側から東側にかけて位置し、紀ノ川と和歌川を結ぶ運河でもある堀川、西汐入川、広瀬川からなる外堀と内堀とに囲まれた上級藩士の屋敷地です。江戸時代の絵図や『紀伊国名所図会』からは、外堀の内側に沿って松を植えた土塁が巡っていた様子が伺えます。

和歌山城が築城された当時、城の正面は城の南東側にあったとされていますが、その後北側の京橋口が正面となり、一の橋が大手門(城の正門)となりました。このため、和歌山城の玄関口にあたる三の丸北側は、紀州徳川家の御付家老で新宮城主水野氏、田辺城主安藤氏や家老である三浦氏など上級藩士の中でも特に身分の高い重臣たちの屋敷が配置されていました。



平成25年度調査地(東から)



屋敷地境界柱列

発掘成果

和歌山城跡の発掘調査は開発に伴い継続的に行われており、これまでの調査成果から和歌山城が築造される以前の土地利用や、近世における武家屋敷地の変遷、上級藩士の生活の様子が明らかになりつつあります。

東側三の丸の南西端の区画は、江戸時代の絵図等によると多い時期で7家の武家が屋敷を構えていたとみられますが、平成18・23・25年度に発掘調査が行われ、特に平成25年度の調査では地下式倉庫や井戸、池などの遺構が検出されているほか、屋敷地の境界とみられる土塀の痕跡や溝、柱列が検出され、江戸時代を通しての武家屋敷地の変遷を追うことができました。また、現在の地方裁判所庁舎敷地内で行われた発掘調査では、土層の堆積から災害のたびに何度も整地を行っていることも判明しました。

調査ではごみを廃棄した穴を多く検出しましたが、中にはカキ・サザエ・ハマグリ・クロアワビ等の貝殻が大量に捨てられたものもあり、上級藩士たちの豊かな食生活が伺えます。ほかにも武家屋敷の生活を伺わせる遺物として、硯や水滴といった文具や化粧品を入れていた紅皿やお歯黒用の鉄漿壺、ままごと道具とみられるミニチュア土製品や泥面子等があります。

また、調査では江戸時代に使われた大量の陶磁器類も出土しています。中国から輸入したものや肥前・瀬戸美濃といった国内の主要な陶磁器産地のものが多い一方で、当時の紀州藩内で焼かれていた瑞芝焼や南紀男山焼もみられます。中でも手びねりで作られた黒釉陶器の鳥形香合は内面に金箔を貼るなど他の陶磁器とは大きく異なることから、藩主から拝領したお庭焼きの可能性もあります。

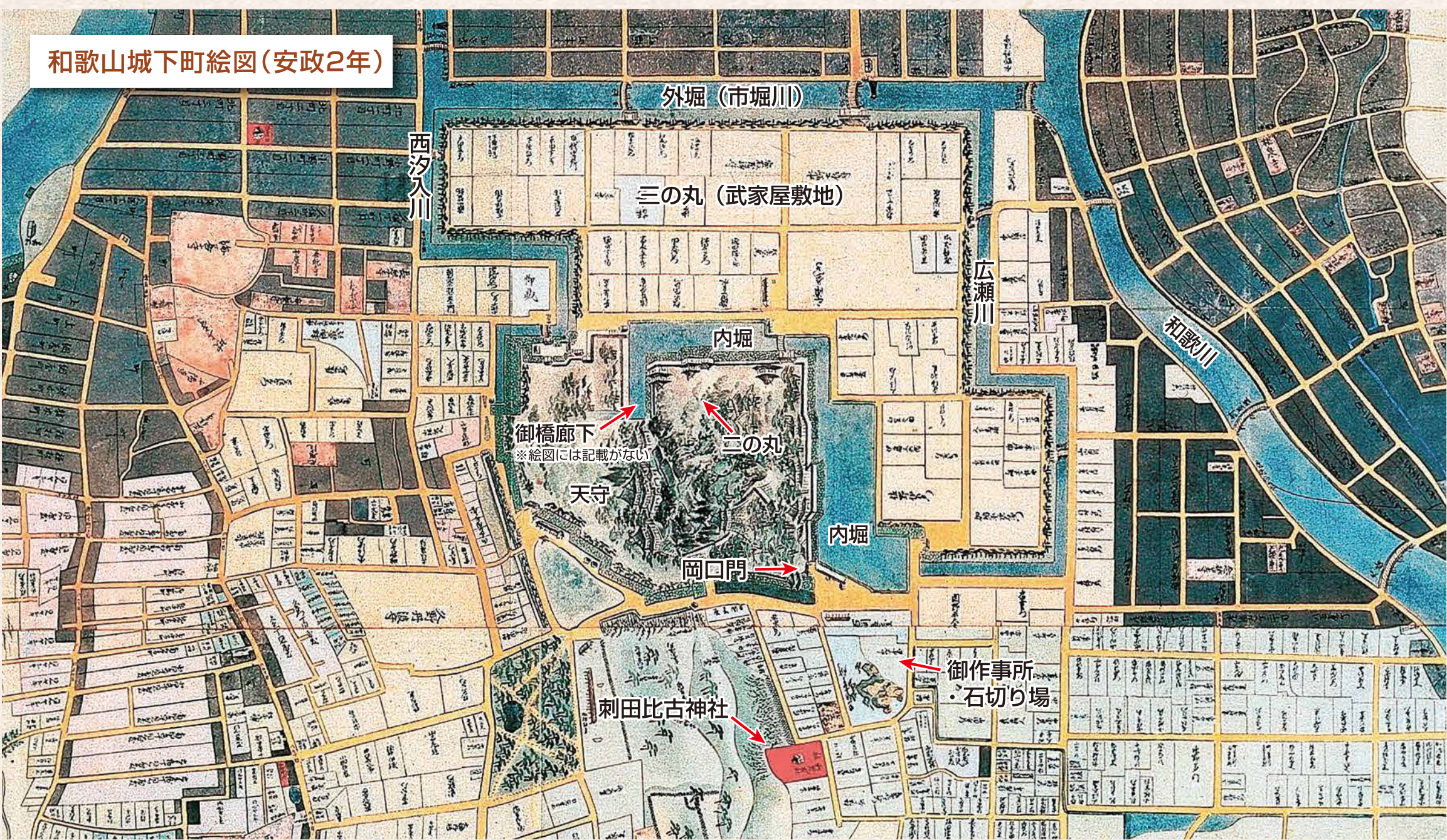


黒釉鳥形香合



煎茶道具

和歌山城下町絵図(安政2年)



『和歌山城下町絵図』(安政2年 和歌山市立博物館所蔵)に加筆

和歌山城の石垣、石切り場・御作事所跡

和歌山城内の石垣は、主に築造された時期によって自然石や切り出した石材をそのまま積む「野面積み」、石材の表面を加工して積み上げ、石材間の隙間を減らした「打ち込みハギ」、石材の表面をより丁寧に加工して密着するように積み上げた「切り込みハギ」という積み方が異なる3種の石垣が現存しています。

また、石垣に使用されている石材も紀州の青石と呼ばれる「緑色片岩」、友ヶ島から切り出された「砂



野面積み



打ち込みハギ



切り込みハギ



矢穴跡

岩」、熊野地方から運ばれた「花崗斑岩」の3種類が確認されています。野面積みに使用された緑色片岩は、現在の岡公園内にある緑色片岩塊などから切り出されたものと言われており、現在でも岡公園に残る岩塊の表面には、矢穴と呼ばれる石材を割る際につけられた工具の痕跡等を見ることができます。御作事所跡とは、和歌山城をはじめとする藩の施設の建築修理に関わる事務所があった場所です。安政2年(1855)の『和歌山城下町絵図』によると、和歌山城の南、現在の岡公園にあったとみられます。

西之丸庭園(紅葉溪庭園・御橋廊下)

西之丸庭園は頼宣が西の丸御殿に築いたことに由来する庭園です。昭和48年に庭園を整備し、昭和60年に「西之丸庭園」として国の名勝に指定されました。紅葉が見事で「紅葉溪庭園」とも呼ばれています。

御橋廊下は西の丸と二の丸の間にかけられた全長27m、高低差3.4mの傾斜のある全国的にも珍しい橋状の廊下で、藩主と付き人のみ渡ることができたと伝えられています。風雨を避け、外から姿が見えないように屋根と壁が設けられており、滑らないように廊下の床板は鋸歯状に組んでであるのが特徴です。

平成11年度に堀底の発掘調査が行われ、橋脚の据え付け遺構が検出されました。検出された礎石から、御橋廊下は3本1組、8列に及ぶ橋脚で支えられており、また橋脚の基礎は杉の板材を直径1.4mの円形に組んでその中に礎石を据え、粘土や砂礫で内外を補強する構造であることが明らかになりました。平成18年にはこれらの発掘成果と江戸時代の図面を元に橋が復元され、現在は自由に渡ることができるようになっています。



御橋廊下の橋脚跡(写真撮影:和歌山市)



「鯨魚閣」と紅葉(写真撮影:和歌山市)

和歌山城二の丸

元和5年(1619)、和歌山城主となった頼宣は、元和7年(1621)幕府より銀2000貫を賜り、城の拡張に着手します。その中には二の丸の西への拡張も含まれており、堀の一部を埋めて浅野家が城主であったときの「御屋敷」を西に拡張し、御殿を充実させました。この拡張された二の丸が江戸時代の和歌山城の政治と生活の拠点となり、江戸時代後期には江戸城本丸御殿を意識して、表・中奥・大奥と呼び分けられていました。

二の丸は平成19～27年度にかけて発掘調査が行われ、浅野期の石垣や江戸時代後期の石組み井戸等の遺構が数多く検出されました。特に二の丸北西隅部で行われた調査では、文政8年(1825)頃に描かれた「和歌山二ノ丸大奥当時御有姿之図」と合致するような礎石据付穴や土塀基礎石組などがセットで検出されており、江戸時代後期の遺構が良好に残っていることが明らかになりました。



浅野期の石垣石材に残る刻印



浅野期の石垣(北西から)

(写真撮影:和歌山市)